

「新たな評価」に

そなえよ！

現場から考える現実解



はじめに

連載第3回では、導入

に向けて制度設計が進む
新たな認証評価制度と、
学修成果の評価、すなわ
ち「アセスメント」との
関係性について取り上げ
る。構成としては、新た
な評価で求められるアセ
スメントの在り方を考察
した上で、既存のアセ
メントプランの課題を抽
出し、それらを解決する
アセスメントプランの更
改事例を示すものとす
る。

新たな評価で求められ
るアセスメント

新たな評価制度は、全
学的な内部質保証システ
ム

近畿大学 白藤康成



ムが機能しているかを確
認する機関全体の評価を
土台とし、その上で学修
者により近い学部・学科
の教育の質を測る評価を
行う、二階建て構造をと
る。学修成果を把握する
「アセスメント」におい
ても、全学レベルで直接
評価と間接評価を組み合
わせた方法が求められる
ことはもとより、個別の
学位プログラムレベルで
も多面的な評価が強く要
求されることとなる。各
学部は、学生が資質・能
力を修得したか複数の評
価方法を組み合わせ、把
握するとともに、把握し
た結果を活用して教育改

開するだけでなく、それ
が実際の教育成果に結び
ついていくという確たる
証拠を示さなければなら
ない。成績評価や卒業論
文に対する評価等の直接
評価を主軸にしつつ、学
生調査による成長実感や
満足度等の間接評価も取
り入れて、資質・能力の

修得を多面的な根拠をも
って示さなければならな
い。よって、学修成果の
把握の方針であるアセ
メントプランにおいて
も、これらの要求に耐え
うるために内容の精緻化
と、方針に基づく組織的
な実行が問われることと
なる。

既存のアセスメント
プランの課題

2012年に発出され
た「質的転換答申」の用

めた方針である旨が新た
に加えられた。2020
年の「教学マネジメント
指針」では、「アセスマ
ントプラン」と名を改め
るものの、この追記、す
なわち共通性に関する表
記は継続している。

現在、各大学のホーム
ページ等で公開されてい
るアセスメントプラン
は、この定義に呼応し
て、プログラム間に共通
する尺度をまとめた全学

育の質向上に結び付ける
際に困難性を抱える。
また、学位プログラム
ごとに育成すべき学修成
果を把握しようとしてい
るかという全学的な方針
を、「鳥の目」で俯瞰で
みる。また、時間軸が入
る。また、時間軸が入
る。また、時間軸が入

は、この定義に呼応し
て、プログラム間に共通
する尺度をまとめた全学
これは学生の成長を重視す
る新たな評価の理念にも
合致している。

アセスメントプランは、
尺度ごとに、何を把握
し、いつ実施し、その責
任部署はどこで、得られ
た結果をどのように活用
するかを示す構成をとっ
ている。実施責任部署や
結果の活用方法の主体に
は、全学的な組織を中心
に記載している。なお、
尺度は、直接評価と間接
評価を組み合わせて多面
的に学修成果を把握する
ことを意識したラインナ
ップになっている。

一方、後者の学部・学
科単位のアセスメント
プランは、構成は全学と同
様のものを踏襲している
が、必要に応じて各専門
分野の特性に応じた独自
の尺度を設定している。

新たなアセスメントプランをどう構築するか

学位プログラムの学修成果を評価・活用する

語集にて、学修成果の評
価の目的や方法を定めた
方針として「アセスマ
ント・ポリシー」が示され
る。このポリシーは、
中・卒業時という時間軸
を、縦軸に機関・学位
プログラム・科目の評価レ
ベル軸をとり、各セク
メント内に尺度を列挙する
マトリクス型(表1)が
通ずる考え方や尺度を定
よくみられる(竹

開するだけでなく、それ
が実際の教育成果に結び
ついていくという確たる
証拠を示さなければなら
ない。成績評価や卒業論
文に対する評価等の直接
評価を主軸にしつつ、学
生調査による成長実感や
満足度等の間接評価も取
り入れて、資質・能力の
通ずる考え方や尺度を定
よくみられる(竹

	入学時	在学中	卒業時
機関 レベル	入学試験 アセスメントテスト	アセスメントテスト GPA 修得単位数 学生調査 学修時間 留年率・中退率	GPA 修得単位数 学生調査 学位の取得状況 進学率・就職率
学位プログラム レベル	入学試験 アセスメントテスト	アセスメントテスト GPA 修得単位数 学生調査 学修時間 留年率・中退率	GPA 修得単位数 卒業論文・卒業研究 学生調査 学位の取得状況 進学率・就職率
科目 レベル		ルーブリック 成績評価 授業評価アンケート 出欠状況	

表1 マトリクス構成のアセスメントプランのサンプル

適切に行えることに加
え、評価結果を学部・学
科の教育改善へつなげ
る。必要に応じて各専門
分野の特性に応じた独自
の尺度を設定している。
また、各尺度の実施責任
部署と結果の活用方法に
おいては、学科会議や各
教員など、メゾレベル・
ミクロレベルのものを主
体として設定している点
に含めるべき構成要素と
も差異にあたる。これに
よって、専門分野の特性
に応じた尺度や、結果の活
用方針を明記する重要性
が、学修者により近い
立場で学修成果の評価が
用いられるべきである。

本稿では、新たな評価
推進に向けた議論の一助
となれば幸いである。

参考文献
竹中喜一(2020)「アセ
スメントプランを実質的
に機能させるための視点
《上》」『教育学術新
聞』第2819号